

# Religiousness の 問 題

岡 精 三

## 序

歴史を人類が知的に発展してきたことを言いあらわす言葉として development history あるいは history of developments という言葉で単純に言いあらわし、夫々の知的分科の発展を、例えば、development of medicine（医学の出現）という言葉で言いあらわすことが出来るとすれば、医学のその後の発展を言いあらわすのに history of medical developments あるいは history of development of medicines という言葉で言いあらわしてもよいと思う。医学のような学問ではこのような表現でこれらの言葉が内包する意味を誤解されることなく言いあらわすことが出来るのであるが、宗教についても同じようなことが言えるか、ということになると簡単にはイエスという答を与え得ない複雑な問題が宗教には含まれている。宗教も人類がその歴史の発展過程の中で develop させたものであるのだから development of religion という言葉は意味をもつし、development of Christianity という表現も意味をもつ表現である。しかし、history of religious developments という表現になると medical developments と言った場合に理解されるような意味内容と同じ内容をもつものとしては理解されないだろう。けれども History of developments of religion という表現は類を異にする幾多の宗教の発生過程を歴史的に意味付けた内容をあらわす言葉としては、受けとめられるのである。では、history of religious developments of Christianity という表現はどうであろう。キリスト教そのものの宗教的発展を物語る歴史という意味をもたせた表現である。

もしも、キリスト教が人類の宗教的知的発展に寄与するものがあったとすれば、この表現は十分に意味をもつ表現になる。

しかし、religious developments というと、一般的には、個人の宗教的経験とか成長を意味する言葉としてしか意味付けられていないのである。そして、

人類が今日の科学的発展の所産を history of developments という言葉で語り得るような意味での development を宗教は（キリスト教でも）果してこなかったというのが今日多くの人の持っている見解であろう。結果論的に言い得ることではあるが、今日の知的世界の歪みが真実な意味での religious developments の欠如にあるのだとしたら、我々は Religiousness とは何なのかが真面目に問い直されない限り、人類は旧套を脱し得ないままに、所謂新興宗教と呼ばれるものの跋扈横暴を許さなければならないであろう。この小論は旧約に対する新約の意味を Religiousness の問題として考究した試論であって従来の福音書の解釈に敢て一石を投じるものである。

## (1)

キリスト教はユダヤ教を母体として、develop したユダヤ教とは全く異質な超民族的宗教であった。旧約聖書はイスラエルと呼ばれるに至ったセム族の宗教がどのような過程をもって形成され、またどのような過程をもって崩壊するに至ったのかを記録している。これらの過程を一番端的に物語っているのがイスラエルの祭司制度の成立とその機能的破綻の歴史であろう。

イスラエルのエジプト脱出に始まる彼らの民族独立運動の歴史はレビ人モーセの召命を契機とする。<sup>1)</sup>モーセは兄弟アロンの助力を得て、この大事業に着手する。<sup>2)</sup>彼らにとってこの事業は政治的宗教的意図をもったものであるが、<sup>3)</sup>イスラエルの大衆にとっては極めて冒険的な難事であった。<sup>4)</sup>モーセはこのために大衆の行動をどのように指導すべきか、ということで大衆を政治的宗教的に組織化し、<sup>5)</sup>祭司を任命することをもってこれに当たらしめたのである。<sup>6)</sup>しかし、大衆は組織、制度の確立によって彼らの意識を変革し得たわけではない。<sup>7)</sup>モーセにとって肝要な関心事は彼らの意識を変革することであった。モーセは一族（レビの子たち）をもってこの難事業の遂行にあたるのであるが、<sup>8)</sup>彼が着手した意識の変革は彼らの宗教的意識を確立することであり、<sup>9)</sup>そのために祭司職を制度化することであった。<sup>10)</sup>此处で注目されることは祭司職をレビ族の独占的職権としたことである。<sup>11)</sup>彼らの職権はイスラエルを神によって祝福される民とするための中核的存在になることであった。<sup>12)</sup>一方にモーセの政治的行動は独裁者になる危険性があり、<sup>13)</sup>他方大衆はモーセの強行策に反抗する。<sup>14)</sup>しかし、モーセは強

行策がモーセ自身の意図によるものではなく、神の召命によるものであることを証しするのであるが、<sup>15)</sup>モーセに対する反抗はモーセ自身の身内であるレビの子たちの間からも起り、神の召命の再確認が要求される。<sup>16)</sup>大衆が神の召命の立証されることを要求するこれらの事件は、<sup>17)</sup>Religiousness を確立することのむずかしさを物語るものであり、それが自得されない限り、確立し得ないものであることを物語っているのであろう。大衆の眩きは苦難を迎えるたびに爆発するのである。<sup>18)</sup>生きるということには二つの道があるように思われる。一つは自分の生命を完うすることであり、他の一つは義を完うすることである。Religiousness の問題は前者に存する問題なのではなく、後者に係わる問題なのである。<sup>19)</sup>しかし、Religiousness の問題が後者、即ち義を完うすることに係わる問題であるということが大衆に自得させることは非常に難しいことであった。<sup>20)</sup>出エジプト記と民数記とに記されている物語を以上、述べてきたようにまとめてみると、これは Religiosity と Religiousness のちがいの問題でもあるということになろう。申命記は祭司の職権を「レビの子孫である祭司たちは……あなたの神、主が自分に仕えさせ、また主の名によって祝福させるために選ばれた者で、すべての論争と、すべての暴行は彼らの言葉によって解決されるからである」。<sup>21)</sup>と記し、更に「モーセはこの律法を書いて、主の契約の箱をかつぐレビの子孫である祭司およびイスラエルのすべての長老たちに授けた。そしてモーセは彼らに命じて言った、7年の終りごとに、すなわち、ゆるしの年の定めの時になり、かりいおの祭りに、イスラエルのすべての人があなたの神、主の前に出るため、主の選ばれる場所に来るとき、あなたはイスラエルのすべての人の前でこの律法を読んで聞かせなければならない。すなわち男、女、子供およびあなたの町のうちに寄留している他国人など民を集め、彼らにこれを聞かせ、かつ学ばせなければならない。そうすれば彼らはあなたがたの神、主を恐れてこの律法の言葉を、ことごとく守り行うであろう。また子供たちでこれを知らない者も聞いて、あなたがたの神、主を恐れることを学ぶであろう。あなたがたがヨルダンを渡って行って取る地にながらえる日のあいだ常にそうしなければならない」。<sup>22)</sup>と記している。何れも Religiousness の問題の重要性を祭司の職務に帰しているのである。

イスラエルがカナンの地を攻略し、支配するに至るのはダビデの時であった。

歴代志上十三章以下を読むと「ここにダビデは千人の長、百人の長などの諸将と相はかり、そしてダビデはイスラエルの全会衆に言った“もし、このことをあなたがたがよしとし、われわれの神、主がこれを許されるならば、われわれは、イスラエルの各地に残っているわれわれの兄弟ならびに、放牧地の付いている町々にいる祭司とレビびとに、便をつかわし、われわれの所に呼び集めましょう。また神の箱をわれわれの所に移しましょう。われわれはサウルの世にはこれをおろそかにしたからです。” 会衆は一同“そうしましょう”と言った。このことがすべての民の目に正しかったからである<sup>23)</sup>。……「ダビデは祭司ザドクとアビヤタル、およびレビとウリエル、アサヤ、ヨエル、シマヤ、エリエル、アミナダブを召し、彼らに言った、“あなたがたはレビびとの氏族の長である。あなたがたとあなたがたの兄弟はともに身を清め、イスラエルの神、主の箱をわたしがそのために備えた所にかき上りなさい。さきにこれのかいた者があなたがたでなかったので、われわれの神、主はわれわれを撃たれました。これはわれわれがその定めにしたがってそれを扱わなかったからです。”そこで祭司たちとレビびとたちはイスラエルの神、主の箱をかき上げるために身を清め、レビびとたちはモーセが主の言葉にしたがって命じたように、神の箱をさおをもって肩に<sup>24)</sup>になった」と記されている。これらの記事を読むと王国の建設に終始したサウル、ダビデの時代は彼らにとって最大の関心事であった Religiousness の重要さが投閑に附されていたかのように見受けられる。これを裏書きするかのように主の契約の箱がダビデの町に運び込まれたときの状景をサウルの娘ミカルが窓からながめ、「ダビデ王の舞い踊るのを見て、心のうちに彼をいやしめた<sup>25)</sup>」と記している。この時のダビデは Religious であったというよりも religiose であったと言うべきであろう。「さてダビデは自分の家に住むようになったとき、預言者ナタンに言った、“見よ、わたしは香柏の家に住んでいるが、主の契約の箱は天幕のうちにある。” ナタンはダビデに言った、“神があなたとともにおられるから、すべてあなたの心にあるところを行いなさい”」に始まる十七章は三節から十五節にナタンに臨んだ神の言葉が記され、十六節から二十七節には、主の前に座して語ったダビデの言葉が記されている。人は此処に語られているダビデの言葉をもって彼の Religiousness を主張するかもしれないが、Religious development とは何であるのかを問題にする観点に

立つならば読み取り方もちがってくるのではなからうか。

筆者にとって興味深く思われるのは、二十一章に「時にサタンが起ってイスラエルに敵し、ダビデを動してイスラエルを数えさせようとした。ダビデはヨアブと軍の将校たちに言った、<sup>26)</sup>“あなたがたは行って、ベルシバからダンまでのイスラエルを数え、その数を調べてわたしに知らせなさい。” ヨアブは言った、<sup>27)</sup>“それがどのくらいあっても、どうか主がその民を百倍に増されるように、しかし王わが主よ、彼らは皆あなたのしもべではありませんか。どうしてわが主はこの事を求められるのですか、どうしてイスラエルに罪を得させられるのですか。しかし主の言葉がヨアブに勝ったので、ヨアブは出て行って、イスラエルをあまねく行き巡り、エルサレムに帰って来た。そしてヨアブは民の総数をダビデに告げた。すなわちイスラエルにはつるぎを抜く者が百十万人、ユダにはつるぎを抜く者が四十七万人あった。しかしヨアブは王の命令を快しとしなかったもので、レビとベニヤミンとはその中に数えなかった」。「この事が神の目に悪かったので、神はイスラエルを撃たれた。そこでダビデは神に言った、<sup>27)</sup>“わたしはこの事を行って大いに罪を犯しました。しかし今どうか、しもべの罪を除いてください。わたしは非常に愚かなことをいたしました”」。

物語は此処で、主がダビデの先見者ガデに告げられた三つの設問のうちの一つを選ぶように、ダビデに要求するのである。この要求に対して、ダビデはガデに「わたしは非常に悩んでいるが、主のあわれみは大きいゆえ、わたしを主の手に陥らせないでください。しかしわたしを人の手に陥らせないでください<sup>28)</sup>」<sup>28)</sup>と言い、イスラエルに下された疫病で七万人が倒れたのを知って、「民を数えよと命じたのはわたしではありませんか。罪を犯し、悪い事をしたのはわたしです。しかしこれらの羊は何をしましたか。わが神、主よ、どうぞあなたの手をわたしと、わたしの父の家にむけて下さい。しかし災をあなたの民に下さないでください<sup>29)</sup>」と神に訴えていることである。<sup>29)</sup>

ダビデは Religiousness を回復して「わが子ソロモンは若く、かつ経験がない。また主のために建てる家はきわめて壮大で、万国に名を得、栄えを得るものでなければならぬ。それゆえ、わたしはその準備をしておこう<sup>30)</sup>」と。こうしてダビデは死ぬ前に多くの物資を準備した<sup>30)</sup>と記している。そして「ダビデはまたイスラエルのすべてのつかさたちにその子ソロモンを助けるように命

じて言った。『あなたがたの神、主はあなたがたとともにおられるのではないか。四方に泰平を賜わったではないか。主はこの地の民をわたしの手にわたされたので、この地は主の前とその民の前に服している。それであなたがたは心をつくし、精神をつくしてあなたがたの神、主を求めなさい。たって主なる神の聖所を建て、主の名のために建てるその家に、主の契約の箱と神の聖なるもろもろの器を携え入れなさい』<sup>31)</sup>と神殿の建設を訴える。

かくして、神殿はソロモンの手によって造営され完成するのである。歴代志はその状景を「そして祭司たちが聖所から出たとき、そして彼らがラッパとシンバルとその他の楽器をもって声をふりあげ、主をほめて『主は恵みあり、そのあわれみはとしこえに絶えることがない』と言ったとき、雲はその宮すなわち主の宮に満ちた。祭司たちは雲のゆえに立って勧めをすることができなかった。主の栄光が神の宮に満ちたからである」<sup>32)</sup>と象徴的に画き出し、更に「そこでソロモンは言った、『主はみずから濃き雲の中に住まおうと言われた。しかしわたしはあなたのために高き家、とこしえのみすまいを建てた。』そして王は顔をふり向けてイスラエルの全会衆を祝福した<sup>33)</sup>」と記して、得意の絶頂にあるソロモンの姿を彷彿させている。ソロモンは Religiousness の何であるのかを知っていたのかかもしれない。彼がイスラエルの全会衆に言ったことの中に「しかし神は、はたして人と共に地上に住まわれるでしょうか。見よ、天も、いと高き天もあなたをいれることはできません。わたしの建てたこの家などなおさらです。しかしわが神、主よ、しもべの祈と願いを顧みて、しもべがあなたの前にささげる叫びと祈をお聞きください。どうぞ、あなたの目を昼も夜もこの家に、すなわち、あなたの名をそこに置くと言われた所に向かってお聞きください。どうぞ、しもべがこの所に向かってささげる祈をお聞きください。どうぞ、しもべと、あなたの民イスラエルがこの所に向かって祈る時に、その願いをお聞きください。あなたのすみかである天から聞き、聞いておゆるしください<sup>34)</sup>」と言っている。彼が神殿を建てたのは神が父ダビデのために約束されたということを守ってのことであった<sup>35)</sup>。彼は名君として四海に名を轟かせ巨額の富を獲ち得たけれども、<sup>36)</sup>彼はそのために多くの犠牲を民に支払わせたのであった。大衆の不満はソロモンの子レハベアムが王位を継承した時に勃発する。

歴代志には「レハベアムはシケムへ行った。すべてのイスラエルびとが彼を

王にしようとシケムに行ったからである。ネバテの子ヤラベアムは、ソロモンを避けてエジプトにのがれていたが、これを聞いてエジプトから帰ったので、人々は人をつかわして彼を招いた。そこでヤラベアムとすべてのイスラエルは来て、レハベアムに言った、「あなたの父は、われわれのくびきを重くしましたが、今あなたの父のきびしい使役と、あなたの父が、われわれに負わせた重いくびきを軽くしてください。そうすればわたしはあなたに仕えましょう<sup>37)</sup>」と記されている。レハベアムはこのヤラベアムの提案を二つのグループに相談するのである。一つのグループはソロモンに仕へた長老たち、他の一つは彼と一緒に大きくなった若者たちである。前者は「あなたがもしこの民を親切にあつかい、彼らを喜ばせ、ねんごろに語られるならば彼らは長くあなたのしもべとなるでしょう<sup>38)</sup>」と答え、後者は「わたしの小指は父の腰よりも太い、父はあなたがたに重いくびきを負わせたが、わたしはさらに、あなたがたのくびきを重くしよう。父はむちでああなたがたを懲らしたが、わたしはさそりであなたがたを懲らそう<sup>39)</sup>」と言えとすすめる。レハベアムは若者たちの勧めに従ったため、王国はレハベアムを王とする南方ユダとヤラベアムを王とする北方イスラエルとに分裂し互に国の強さを競うようになった。

南方ユダ王国は五年の後ちにエジプト王シシャクの軍門に屈する事態を迎えるのである。他方、「ヤラベアムはエフライムの山地にシケムを建てて、そこに住んだ。彼はまたそこから出てベヌエルを建てた。しかしヤラベアムはその心のうちに言った、「国は今ダビデの家にもどるであろう。もしこの民がエルサレムにある主の宮に犠牲をささげるために上るならば、この民の心はユダの王である彼らの主君レハベアムに帰り、わたしを殺して、ユダの王レハベアムに帰るであろう。」そこで王は相談して、二つの金の子牛を造り、民に言った、「あなたがたはもはやエルサレムに上るにはおよばなさい。イスラエルよ、あなたがたをエジプトの国から導き上ったあなたがたの神を見よ。」そして彼は一つをベテルにすえ、一つをダンに置いた。この事は罪となった、民がベテルに行き一つを礼拝し、ダンへ行き一つを礼拝したからである。彼はまた高き所に家を造り、レビの子孫でない一般の民を祭司に任命した」と列王紀は記している。レハベアムにとっても何が Religiousness の問題であるのかといったことは最早問題にされなくなってしまったのである。これを問題にして立ちあがった

のが預言者であった。分裂した王国は北王国が前 721 年に、南王国が前 587 年に滅亡し、バビロニア捕囚をとかれた前 537 年以後もイスラエルはペルシャ、マケドニア、ローマの支配下に苦難の道を歩むのである。前 167 年、マッカビ一家の反逆によってユダヤ人は独立（前 142 年）をかちとるけれども昔日の王国再建という夢は遂に実現することなくイエスの時代を迎えるに至るのであるが、この間の模様を更に詳述すると、捕囚から帰還を許されたイスラエルはエルサレムの神殿の再建を許され、前 516 年にこれを完成し、彼らは王政に代る祭政国家として存続するのである。彼らはこれによってかつての Religiousness を回復し得たであろうか。

前 450 年頃に記されたとされる預言者マラキは、「祭司たちよ、今この命令があなたがたに与えられる。万軍の主は言われる、あなたがたがもし聞き従わず、またこれを心に留めず、わが名に栄光を帰さないならば、わたしはあなたがたの上に、のろいを送り、またあなたがたの祝福をのろいに変える。あなたがたは、これを心に留めないで、わたしはすでにこれをのろった。見よ、わたしはあなたがたの子孫を責める。またあなたがたの犠牲の糞を、あなたがたの顔の上にまき散らし、あなたがたをわたしの前から退ける。こうしてわたしが、この命令をあなたがたに与えるのは、レビと結んだわが契約が、保たれるためであることを、あなたがたが知るためであると、万軍の主は言われる。彼と結んだわが契約は、生命と平安との契約であって、わたしがこれを彼に与えたのは、彼にわたしを恐れさせるためである。彼はすでにわたしを恐れ、わが名の前におののいた。彼の口には、まことの律法があり、そのくちびるには、不義が見られなかった。彼は平安と公義とをもって、わたしと共に歩み、また多くの人を不義から立ち返らせた。祭司のくちびるは知識を保ち、人々が彼の口から律法を尋ねるのが当然である。彼は万軍の主の使者だからだ。ところが、あなたがたは道を離れ、多くの人を教えてつまずかせ、レビの契約を破ったと、万軍の主は言われる。あなたがたはわたしの道を守らず、律法を教えるに当って、人にかたよったがために、あなたがたをすべての民の前に侮られ、卑しめられるようにする。われわれの父は皆一つではないか。われわれを造った神は一つではないか。なにゆえ、われわれは先祖たちの契約を破って、おのおのその兄弟に偽りを行うのか」と祭司たちの非宗教性を糾弾しているのである。



このような祭司のもとにあったイスラエルの大衆はどのような関心を宗教に対してよせたのであろうか、マラキはこの点についても、「主は言われる、あなたがたは言葉を激しくして、わたしに逆らった。しかしあなたがたは“われわれはあなたに逆らって、どんな事を言ったか”と言う。あなたがたは言った、  
“神に仕える事はつまらない。われわれがその命令を守り、かつ万軍の主の前に、悲しんで歩いたからといって、なんの益があるか。今われわれは高ぶる者を、祝福された者と思う。悪を行う者は栄えるばかりでなく、神を試みても罰せられない”<sup>42)</sup>」と記している。

マラキがこれらの言葉を書き残した後ちのイスラエルの状況は政治的混迷に攪乱され、伝統に忠実に生きるか、それとも異教の政策に歩調を合わせるかの二者択一を迫られるといった状況下に、宗教的にはいくつかの分派を生み、夫々が独自の道を歩むということになる。そのために一般大衆はそれらの圏外に置きざりにされていったと看做してよいであろう。

イスラエルの歴史を、1) エジプト脱出からカナン定着迄 2) カナン征服から王国の建設迄 3) 王国分裂から南北両王朝の崩壊を経て神殿の再建迄 4) 神殿再建からユダヤ人の独立迄、の四段階に分けて夫々の時期に見られる宗教的推移の特色をあげると、1) は宗教聯合 (amphictyony) が形成される時期、2) は宗教聯合の象徴であった契約の箱が幕屋から神殿に安置され、宗教聯合が統一国家的性格に変貌する時期、3) はイスラエルを特色付けて来た宗教聯合の概念が完全に払底される時期、4) はイスラエルの宗教は神殿の祭儀を中心とすべきか、律法の遵守を重視すべきか、それとも王国の再建に俟つべきかが問われた時期、ということになる。

このように区分して見ると、その後の彼らの歴史が物語っているように、イスラエルは A.D. 66~70 と 132~135 に示したローマ帝国への最後の反抗に破れて、歴史の舞台から消え去るのであるが、パリサイ派の人々によって遵守された律法だけが talmud の形で残され、今日のユダヤ教に受けつがれて行くのである。彼らの歴史は筆者が問題にしている religious developments という点では何一つ見るべきものを残してはいない、と言えるかもしれない。

このように見て来ると、彼らは信仰の何であるのかを語り得たけれども、Religiousness とは何であるのかを展開することができなかったのである、と言

ってよいであろう。この信仰と宗教性との裂け目にどのような答えが与えられなければならないのか、筆者はそれがイエスによって提出された問題であったと考える。イエスは Religiousness とは何であるのかを、人間の語り得る言葉としてではなく、神が語る言葉として、彼らに提示した人物であったのである。

John Bright はその著 "A history of Israel" のエピローグ「Toward The Fullness of Time」を(1) The Terminus of Israel's History: The Historical and the Theological Problem. (2) Whither Israel? Sects and Parties in Judaism. (3) The Destination of Israel's History: The Answer of Judaism and the Christian affirmation の三つの章に分けて論述している。

この第三章は John Bright が到達した結論であり、次に記すものである。「では、イスラエルの歴史はどこへ？結局ユダヤ教は唯一つの答しか与えなかった。その他の答は支持しがたいことを立証している。サドカイ派の答にいたっては実際には答にならなかった。何故ならばサドカイ派は将来を全く指し示さなかったからである。サドカイ派は現状を維持しようとする企てであった。

その現状が終りを告げると共にサドカイ派は存在し得なかったのである。しかも、彼らの答は適応性を欠いていた。軍国的国家主義も答を出し得なかった。

それどころか軍国的国家主義は国家の破滅を招き、それ以来、否応なしに放棄させられ、唯夢見るばかりであった。黙示論も将来への展望を明らかにし得なかった。黙示的希望は単純には実現されなかった、奇妙にも世界史の舞台では何の役割も演じられなかったのであろう。

ユダヤ教は終末的協同体としてはその将来を見出し得なかったのである。実際にとられた道は唯一つしかなかった。

それはパリサイ派によって指適された道である。その道は規準となるユダヤ教に、ミシュナとタルムードに通じる道であった。イスラエルの歴史はユダヤ人の歴史の中に、イスラエルの神によって、律法の下に人類の最後の世代に至るまで生きながらえることを要求された民の歴史の中に、存続するのであろう。

ユダヤ人にとって、夫故、旧約神学はタルムードの中にその実現を見るのである。旧約の希望は、ユダヤ人にとっては未だ成就されない事柄であり、あるユダヤ人たちには熱心に待望され、他のユダヤ人たちには放棄され（何故ならばユダヤ人たちは恐らく終末に関して最早キリスト教徒たちよりも一つ心にな

ってはいないからである), なおその他のユダヤ人たちには世俗化され, あるいは稀薄化されて無限に引きのばされているのである。このようにユダヤ人は, この問題, イスラエルの歴史はどこへ, に答える。それが本当の答であり, 歴史的観点から見ても正しい答なのである。何故ならば, イスラエルの歴史はユダヤ教の中に存続するからである。

しかし, もう一つの別な答がある。それはキリスト教徒が与える答であり, 与えねばならない答である。その答も同じように歴史的には真実な答である。

何故ならば, キリスト教は事実ユダヤ教から起ってきたからである。その答は旧約の歴史と神学の到達点はキリストであり, キリストの福音であるということである。それはキリストが待望された, 神の贖いの力の人類史への決定的な介入であり, 時代の転換であるということであり, キリストによって律法を成就する義と, その義のもつ多様なすべての形でイスラエルの希望が十分に満たされるということの双方が与えられている, ということである。簡単に言うと, キリストはイスラエルの歴史の神学的終端であるということを確認している, ということである。夫故, イスラエルの歴史はどこへ, という問いには二つの相反する答がされるのである。

この問いに対する答は, キリスト教徒とキリスト教徒の友であるユダヤ人とでは分れている。我々は彼らが同じ神, 我々凡ての者の父を拝む同じ信仰の遺産の世継ぎとなるように愛とお互いの関心とをもってやって行くように祈りたい。これらの二つの答が存在するが, 人は実際にはイスラエルの希望は妄想であり, どこにも導くことのない, 人間が切望している考えが作り出した作りごとであると言うかもしれない。人々はそうやってきたのである。しかし歴史は断じて第三の答を許さない。即ちイスラエルの歴史は真直ぐにタルムードに至るか, それとも福音に至るか, のどちらかである。それは実のところその他の方向に至るものではないからである。

夫故, 旧約の歴史は窮局的には人を一つの決定的な問いかけの前に立たせるということである。そして, その問いかけは“あなたは私を誰だと言うのか”という問いである。それは信仰を肯定する者だけが答えうる問いかけなのである。しかし, イスラエルの歴史を読む者は誰もがこの問いかけを認めるか, 否かを問われている。そして, 唯答を与えることを拒む場合には, なんとかして答

を出そうとしているのである。勿論、キリスト教徒は答えなければならない、  
“あなたはキリスト、生ける神である”と。キリスト教徒はそう答えた後で、  
もしも彼が自分の答えたことを認めるならば、彼にとっては、旧約の歴史がそ  
の結論をキリストへと導く、一つの贖のドラマを演じる役割をもっているとい  
った新しい意味をもってくるのである。キリストによって、またキリストのため  
に、キリスト教徒はキリストの歴史を見るのである。そしてその歴史は、な  
お失望と失敗の歴史ではあるが、実際に、また決定的に救済史を作り出す“救  
済の歴史”であるのだ<sup>43)</sup>。

筆者が Bright の一文を引用したのは、旧約の歴史を通してイスラエルの民  
が展開することの出来なかった religiousness の問題を新たな局面で展開して  
いるのがキリストであるということを論証するためにほかならない。

## (2)

Development of Christianity をどのような視点から捕えるかは、一つの問題  
点である。新約聖書が四つの福音書を記載しているということ自体がこの問題  
点と関連しているのではないかと筆者は考える。一つの問題点というのは、  
旧約の歴史に於て喪失された Religiousness の問題である。イエスの宣教は、  
この喪失された Religiousness を回復することにあつたのではないかというこ  
とである。パウロがローマ人への手紙の 3：25～26に「神はこのキリストを立  
てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。今ま  
でに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、それは、今の時  
に、神の義を示すためであつた。こうして、神みずからが義となり、さらに、  
イエスを信じる者を義とされるのである。」と記していることや、6：3～5に  
「あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受け  
たわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。すなわち、  
わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたので  
ある。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされた  
ように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。もしわたした  
ちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様  
にもひとしくなるであろう」とか、10：2～3に「わたしは、彼らが神に対し

て熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである」と記しているのは、凡て喪失された Religiousness の回復についての言及であると看做されよう。またパウロがピリピ人への手紙 3：5～12に「わたしは八日目に割礼を受けた者、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である。しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであり、律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見出すようになるためである。すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達したいのである。わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである」と記しているのも Religiousness の何であるのかをキリスト・イエスによって気付かされ、それを回復することがパウロにとって至上事であったからであろう。福音記者マタイは、この Religiousness の問題を、イエスの山上の垂訓の一節に「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思っ

てはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。よく言っておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることなく、ことごとく全うされるのである。それだから、これらの（いましめのうちの）最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるであろう。わたしは言っておく。あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはできない<sup>44)</sup>」と記している。この点で福音記者マルコがイエスの宣教開始を「イエ

スはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」<sup>45)</sup>と記していることも注目される。というのは福音記者マルコは1：1に「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」と記して、イエス・キリストの福音を指示し乍ら、上述の v. 14 では「神の福音を」とマルコ独自の表現で言いかえているからである。この「神の福音を」という言葉はイエスによって宣べ伝えられる福音は神の福音であり、Religiousnessの何であるかを宣べ伝えるという意に解してよいと考えられるからである。

筆者には福音記者が夫々の福音書を記すに当って多くの点に相違を示しているのはイエスによって提示された Religiousness の問題を夫々の立場で物語ろうとしているからにはほかならないと思われる。そして、そのように解釈した場合に夫々の福音書の独自性が生き生きと理解できる。次に福音記者ルカが記している Religiousness の問題をルカ独自の記述からとり出して少しく詳細に論述してみたい。

ルカはマタイが「母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった」<sup>46)</sup>と記している所を1：26～37に亘って長々と記し、マリヤが御使ガブリエルから「恵まれた女よ、おめでとう。主があなたと共におられます」と御告げを受けた時「この言葉にマリヤはひどく胸騒ぎがして、このあいさつはなんの事であろうかと、思いめぐらしていた」とマリヤの当惑した様子を記しており、「見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。……」と言われると、「どうして、そんな事があり得ましょうか。わたしにはまだ夫がありませんのに」と否定する。しかし、御使は更に「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。……」と言う。そこでマリヤは、やっと「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」と答える。ルカはマリヤがベツレヘムに滞在中、イエスを出産した時の模様を「マリヤは月が満ちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからである」と神の子の降誕を迎えるこの世の姿の無情さを画き、他方この地方で野宿しながら羊の群の番をしていた羊飼たちに主の御使が現われて「あなたがたのために救主がお生まれになった。この方こそ主なるキリス

トである」と伝える。羊飼たちは飼葉おけに寝かしてある幼な子を探しあて、自分たちに告げ知らされた事を人々に告げ知らせたと記している。ルカは「しかし、マリヤはこれらの事をことごとく心に留めて、思いめぐらしていた」と書き添えているのである。しかし、マリヤが何を思いめぐらしていたのかは記していない。ルカは更に2：41～51に、イエスが12才になった時の過越の祭での出来事を記して、ここにも「母はこれらの事をみな心に留めていた」と書き添えている。マリヤは「生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう」と告げられた御使の言葉を思い起して、これらの出来事を心に留め、何が起るのかを思いめぐらしていたのかもしれない。それは、マリヤただ独りが知る想いである。2：51の「心に留めていた」という心の中には、聖霊の示しを受けていた正しい信仰深い人、シメオンがイエスの受割礼に際して「ごらんなさい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしるしとして、定められています。——そして、あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう。——それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです」<sup>47)</sup>と言った言葉も含まれているのかもしれない。ルカは母マリヤに就てもう一つの出来事(8：19～21)を記している。(この記事はルカ独自のものではない。)<sup>28)</sup>「さて、イエスの母と兄弟たちとがイエスのところにきたが、群衆のためそば近くに行くことができなかった。それで、だれかが“あなたの母上と兄弟がたが、お目にかかろうと思って、外に立っておられます”と取次いだ。するとイエスは人々に向かって言われた、“神の御言を聞いて行う者こそ、わたしの母、わたしの兄弟なのである”」。<sup>28)</sup> Helmut Flender はこの記事からイエスの近親は神の国の奥義については何の知識も持っていなかったのだと解釈している。<sup>49)</sup>マルコはこの記事(3：31～35)の前に「イエスが家にはいられると、群衆がまた集ってきたので、一同は食事をする暇もないほどであった。身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。」と記して、身内の者たちがイエスの宣教活動に、どんな思いをもっていたのかを説明しているが、ルカはこのような説明を少しも書き記していない。そこで筆著には、この記事から、先の「心に留めていた」ということの問題は、どういう事になるのかといった疑問が出て来る。

共観福音書はイエスの宣教活動が故郷では歓迎されなかったことを記している。マルコ（6：1～6）とマタイ（13：54～58）は、共にこの記事が前述の近親者の記事の後に記しているのであるが、ルカはこれを宣教活動の最初に、ルカ独自の脚色を施して記している。このことは注目されてよい。ルカの記事（4：16～30）は前段16～22と後段23～30の二段に分けられる。前段は「それからお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである。イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、会堂にいるみんなの者の目がイエスに注がれた。そこでイエスは、“この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した”と説きはじめられた。すると、彼らはみなイエスをほめ、またその口から出るめぐみの言葉に感嘆して言った、“この人はヨセフの子ではないか””とイエスを感嘆する声があげられているのであるが、後段ではイエスが「そこで彼らに言われた、“あなたがたは、きっと『医者よ、自分自身をいやせ』ということわざを引いて、カペナウムで行われたと聞いていた事を、あなたの郷里のこの地でもしてくれ、と言うであろう。”それから言われた、“よく言うておく。預言者は、自分の郷里では歓迎されないものである。よく聞いておきなさい。エリヤの時代に、三年六カ月にわたって天が閉じ、イスラエル全土に大ききんがあった際、そこには多くのやもめがいたのに、エリヤはそのうちのだれにもつかわされないで、ただシドンのサレプタにいるひとりのやもめにだけつかわされた。また預言者エリシャの時代に、イスラエルには多くのらい病人がいたのに、そのうちのひとりもきよめられないで、ただシリアのナアマンだけがきよめられた。”」と Religiousness の何であるのかを語り告げると、「会堂にいた者たちはこれを聞いて、みな憤りに満ち、立ち上がってイエスを町の外へ追い出し、この町が建っている丘のがけまでひっぱって行って、突き落そうとした。しかし、イエスは彼らのまん中を通り抜けて、去って行かれた」と非常に象徴的に記しているのである。<sup>50)</sup>筆者



には、この4：16～30が、その後に展開されるイエスの宣教を一般の人々がどのように受留めるのかを要約しているプロローグのように思える。論述が少し飛躍するが、マルコはイエスが十字架に掛けられた時の様子を15：29～38に「そこを通りかかった者たちは頭を振りながら、イエスをののしって言った、  
“ああ、神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ、十字架からおりてきて自分を救え。” 祭司長たちも同じように、律法学者たちと一緒に、かわるがわる嘲弄して言った、“他人を救ったが、自分自身を救うことができない。イスラエルの王キリスト、いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう。” また一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。昼の十二時になると、全地は暗くなって、三時に及んだ。そして三時に、イエスは大声で、“エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ”と叫ばれた。それは“わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか”という意味である。すると、そばに立っていたある人々が、これを聞いて言った、“そら、エリヤを呼んでいる。” ひとりの人が走って行き、海綿に酔いぶとうを含ませて葦の棒につけ、イエスに飲ませようとして言った、“待て、エリヤが彼をおろしに来るかどうかわかる、見ていよう。” イエスは声高く叫んで、ついに息をひきとられた。そのとき、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた」と記している。

マタイの記事(27：39～51)も略同じである。しかし、ルカの記事(23：35～46)は著しくちがっている。ルカは「民衆は立って見ていた。役人たちもあざ笑って言った、“彼は他人を救った。もし彼が神のキリスト、選ばれた者であるなら、自分自身を救うがよい。兵卒どももイエスをののしり、近寄ってきて酔いぶとう酒をさし出して言った、“あなたがユダヤ人の王なら、自分を救いなさい。” イエスの上には、“これはユダヤ人の王”と書いた札が掛けてあった<sup>50)</sup>」と記している。役人たちのあざ笑いはイエスを三人称で表わしているのであるからこの記事は事象的に語られた言葉であると看做してよいであろう。

そしてルカは一緒に十字架につけられた者たちの言葉を「十字架にかけられた犯罪人のひとりが“あなたはキリストではないか、それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ”と、イエスに悪口を言いつづけ、もうひとりは、それをたしなめて、“おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。

しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない。”そして言った、“イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください。”イエスは言われた、“よく言うておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」と二人の犯罪人との対話を挿入して、「時はもう昼の十二時ごろであったが、太陽は光を失い、全地は暗くなって、三時に及んだ。そして聖所の幕がまん中から裂けた。そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、“父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます。”こう言ってついに息を引きとられた」と記しているのである。ルカはマルコ、マタイが「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれた、と記している部分を「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」という言葉に置きかえているのである。

筆者にはルカがイエスと一緒に十字架に掛けられた二人の罪人の対照的な告白を記すことによって Religiousness の問題の何であるのかを象徴的に物語ることで、イエスの宣教を結論付けているように思える。ルカは、夫れ故、この福音書を閉じるにあたって、「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を援けられるまでは、あなたがたは都にとどま<sup>51)</sup>っていなさい」と記しているのであろう。A. R. C. Leaney は「わたしの父が約束されたものを」とある部分はヨハネ15：16の「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実を結び、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」の影響によるものである、と注解している<sup>52)</sup>。しかし筆者にはこのような注解の仕方が当を得たものであるとは思われない。何故ならばルカ福音書はヨハネ福音書よりも先きに書かれたというのが定説であるからである。けれども、ヨハネ15：16と同じ意味をもったものである、と言うのであれば筆者は同意することに吝かではない。ヨハネが1：1～18に「初に言があった」と記している言は Religiousness そのものを意味付けた言葉であると考えられるからである。

ルカは使徒行伝1：14に「彼らはみな、婦人たち、特にイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひたすら祈りをしていた」と再び母マリヤと兄弟たちのことに言及している。御使ガブリエルの告示が此処

に至って漸く完結したのだと解釈してよいかもしれない。ルカは最早マリヤの名をこれ以上には記していないのである。

筆者はルカが記しているマリヤに係わる記事を辿り乍ら、極めて概略的にではあるが、マリヤ自身が神の子イエスをどのように受けとめて来たのか、それによってマリヤ自身がどのように変化してきたのかを Religiousness とは何なのかの問題として引用して来た。福音記者ルカはイエスに最も近い存在者としてのマリヤから人の子イエスを引きはなしつつ、次第に神の子イエスに近づけている、そしてそれを福音書全体のテーマにしているのではなからうか。

このような見方をして来ると福音書はイエスの与えんとした Religiousness が何であったのかを語り伝えていると同時に弟子たちを始めとして記されている多くの人々の non, anti, あるいは pseudo Religiousness を語り伝えている。夫故に、まさに福音書と呼ばれるべき書であると言えそうである。もしも、福音書を読む人が、Religiousness とは何であるのかを問うことなしに福音書を読むのであれば、福音書は一種のイエス伝として読まれるにちがいない。反対に Religiousness とは何であるのかを問いつつ読むのであれば福音書は福音の書、即ち喪失された Religiousness を回復する書として読まれるにちがいない。ルカはパウロのアグリッパ王に対する弁明の中に、自分がキリスト教に転向するに至った経緯を記している。<sup>53)</sup> その一部を抜粋すると、「そこで、わたしが、“主よ、あなたはどなたですか”と尋ねると、主は言われた、“わたしは、あなたが迫害しているイエスである。さあ、起きあがって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしに会った事と、あなたに現れて示そうとしている事をあかし、これを伝える務めに、あなたを任じるためである。わたしは、この国民と異邦人との中から、あなたを救い出し、あらためてあなたを彼らにつかわすが、それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって聖別された人々に加わるためである”」と記されている。この一文は、いちづにイスラエルの伝統に忠実であったキリスト教の迫害者サウロにとって、イエスとの出会いは Religiousness の何であるかを、気付かせられるに至った体験的出来事であったことを物語っていると言えるであろう。

筆者は序文の中に religious developments という表現で宗教の問題を考えることのむずかしさについて言及すると共に、キリスト教の歴史を religious developments の歴史として考えようとするならば Religiousness とは何であるのかが真面目に問い直されなければならないことを問題としたのである。そして本文に於て旧約の歴史は選民イスラエルがその Religiousness を develop することに失敗した歴史であることを祭司職の形成過程を基にして述べ、新約の歴史を彼らが喪失するに至った Religiousness の回復の歴史と看做して、それが福音書の中心的問題点になっているのではないかということを述べたのである。

今日、信仰を持つことの重要さを説く人の数は多い。しかし、Religiousness の何であるかを追究することの重要さを説く人の数は少ないと言えるだろう。そのために Religiousness と Religiosity とが混同されていても一般には問題とならないのが現実である。筆者はこのような現実を今日の社会が内包している大きな知的矛盾であると考え。しかし、このような矛盾が解決されるためには religious developments ということが、人類の知的真実さの問題として歴史を意味付け得るようにならなければならないだろう。そしてそれを可能にするために、少なくとも福音書は Religiousness の何であるかを展開している書として読まれることが必要であると考え。

#### 註

- (1) エジプト記 3 : 1 ~ 10
- (2) " 4 : 10 ~ 17
- (3) " 5 : 1 ~ 9
- (4) " 16 : 1 ~ 3, 17 : 1 ~ 4
- (5) " 18 : 13 ~ 27
- (6) " 28 : 1 ~ 2
- (7) " 32 : 1 ~ 6, 21 ~ 24
- (8) " 32 : 25 ~ 35
- (9) " 34 : 1 ~ 35
- (10) " 40 : 12 ~ 15, 民数記 3 : 1 ~ 10
- (11) 民数記 3 : 11 ~ 39
- (12) " 6 : 22 ~ 27, 8 : 19, 10 : 9 ~ 10
- (13) " 12 : 1 ~ 8
- (14) " 14 : 1 ~ 4

- (15)   "           14 : 5 ~45, 15 : 32~41
- (16)   "           16 : 28~30, 17 : 1 ~11, 18 : 1 ~32
- (17)   "           20 : 2 ~13
- (18)   "           21 : 4 ~ 9
- (19)   "           22 : 1 ~24 : 25
- (20)   "           25 : 1 ~13
- (21) 申命記       21 : 5
- (22)   "           31 : 9 ~13
- (23) 歴代志上     13 : 1 ~ 4
- (24)   "           15 : 11~15 (John Bright "A History of Israel," revised  
edition SCM Press, P. 163, P. 196 参照)
- (25) 歴代志上     15 : 29 (サムエル記下 6 : 16)
- (26)   "           21 : 1 ~ 6
- (27)   "           21 : 7 ~ 8
- (28)   "           21 : 13
- (29)   "           21 : 17
- (30)   "           22 : 5
- (31)   "           22 : 17~19
- (32) 歴代志下     5 : 11~14
- (33)   "           6 : 1 ~ 3
- (34)   "           6 : 18~21
- (35)   "           6 : 14~16
- (36)   "           8 : 1 ~ 9 : 28
- (37)   "           10 : 1 ~ 4
- (38)   "           10 : 7
- (39)   "           10 : 10~11
- (40) 列王紀上     12 : 25~31
- (41) マラキ書     2 : 1 ~10
- (42)   "           3 : 13~15
- (43) John Bright "A History of Israel" P. 466 ~ 7
- (44) マタイによる福音書 5 : 17~20 (マタイ独自)
- (45) マルコによる福音書 1 : 14~15 (マルコ独自)
- (46) マタイ 1 : 18
- (47) ルカによる福音書 2 : 34~35
- (48) マタイ 12 : 46~50, マルコ 3 : 31~35
- (49) Helmut Flender "St Luke, Theologian of Redemptive History, Translated  
by Reginald and Ilse Fuller, SPCK, P. 30.
- (50) 17~21, 23, 25~30はルカ独自
- (51) ルカによる福音書 24 : 49

- (52) A. R. C. Leaney, "The Gospel According to St Luke" Blacks New Testament Commentaries, Adam & Charles Black P. 294
- (53) 使徒行伝 26 : 2 ~29